鳥になった少年の唄

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鳥になった少年の唄

【Ｎコード】
Ｎ８７５３Ｈ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
窓から空を見ているうちに何時しか少年は鳥になって。チェッカーズシリーズ第四十二弾、幻想的な歌でした。

第一章

鳥になった少年の唄

窓の外を眺めていた。ぼんやりと。
ガラスの向こうには鳥がいた。白い小さな鳥がそこに止まっていた。
さっきまでの雨に濡れてその白い羽根を濡らしてそこにいる。小さな声でさえずっている。
僕はその小鳥を見ながら時間を過ごしている。白いレースのカーテンのあるその部屋で。
部屋の中で一人座ってその窓を見たまま。僕は部屋の中にいる。暖かい筈の部屋なのに。ストーブのおかげで暖かい筈の部屋なのに。何故か気持ちを寒いものにさせて。今この部屋の中にいる。
小鳥は僕には気付かずにまだそこに止まっている。紫になってきている空に飛び立つこともなく窓の側にある小枝を時々眺めたりしているだけだ。
そんな小鳥の視線を見て僕もその小枝を見る。けれど視線は何時の間にか空に移っていた。
僕は心を小鳥に移した。僕が小鳥だったら。
空を飛べるのに。そう思っていた。すると。
僕は何時の間にか窓の外にいて。隣にはあの白い小鳥がいた。そして小鳥に声をかけていた。ごく自然に。
「君はどうして飛ばないの？」
「どうしてって？」
小鳥は首を傾げながら僕の言葉に応えてきた。
「どうしてって。寂しいから」
「寂しいって？」
「空は寂しいんだよ」
彼は言う。

「僕だけが飛んでいて。だからね」
「今は飛ばないの」
「うん」
こう僕に答えるのだった。小鳥になった僕に。
「欲しいものは皆僕のものになったし」
「欲しいものって？」
「小さな写真のかけら」
まずはそれだった。
「それに赤い木の実。誰かがなくした金のボタン」
「それで全部なの」
「もう。ここにあるから」
今いる窓の下に目をやるとそこにそういったものが全部あった。
彼は全部ここに持って来ていてそのうえでここにいるのだった。
「だからね。飛ばないんだ」
「飛ばないの」
「僕は。ここにいたいんだ」
顔を下に向けて僕に答えてくれた。
「これでね。もうね」
「そうなの」
「君はどうするの？」
小鳥は今度は僕に尋ねてきた。
「君は。どうするの？」
「僕は」
小鳥の言葉に応えてふと見たのは上だった。今は青い空に。
「行こうかな。あの子もいるから」
「あの子って？」
「友達がいたんだ」
こう小鳥に答えた。
「友達がね。とてもいい友達が」
「友達が」

「今は。もういないけれど」
この前いなくなった。車にはねられて。それで永遠に僕の前からいなくなって。今はお空にいるんだってお母さんが僕に教えてくれた。
「いたんだ」
「それで今はお空にいるんだ」
「行こうかな」
僕はさらに思った。
「そのお空に」
「行くんだ」
「ずっとね。一緒だったんだ」
僕は俯いて。あの子を思い出しながら小鳥に話した。
「大切な友達だったんだ」
「そこまで大切だったんだ」
「君も。友達はいるよね」
今度は僕が尋ねた。
「やっぱり。いるよね」
「いたよ」
小鳥は僕の問いにこう返してきた。
「いたよ。一人ね」
「そう。一人ね」
「ずっと離れ離れだったけれどやっと見つけたんだ」
「やっとって？」
「さっき大切なものは全部手に入れたって話したよね」
小鳥は話を戻してきた。僕の目をじっと見ながら。

第二章

「写真のかけらに木の実にボタンに」
「うん」
「その他にもう一つあったんだ」
「それもなんだ」
「うん。だからもう飛びたくないんだけれど」
「じゃあ君はずっとここにいるの？」
小鳥の目を見詰め返しながら尋ねた。この小鳥と話していると不思議だった。どういうわけか友達と話をしているみたいだった。僕は本当は人間でこの小鳥は小鳥なのに。
「ここに。ずっと」
「いたいけれどね」
「そうなんだ。じゃあお空にはやっぱり僕だけで」
「ううん、それでもね」
けれどここで小鳥は僕に言ってきた。
「君はお空に行きたいんだよね」
「そうだよ」
小鳥に対して正直に答えた。
「あの子がいるから」
「そう。だったら僕も一緒に行くよ」
「君も？」
「君はお空を飛ぶのははじめてだよね」
こう僕に問うてきた。
「さっきまで人間だったしやっぱり」
「そうだよ」
また正直に小鳥に対して答えた。
「飛行機に乗ったことはあるけれどね」
「だったら余計にね。一緒に行くよ」

真剣な顔で僕に言ってきた。本当に友達みたいに。
「僕も。それでいいよね」
「一緒に来てくれるっていうのなら」
僕に異存はなかった。誰かと一緒ならそれでもう寂しくはないし
それにはじめてだから。断ることなんて全く考えられなかった。
「来て。本当に」
「わかったよ。それじゃあね」
こうして僕達は二羽でお空に飛び立った。小鳥はその間ずっと僕
に話しかけてきた。
「どう？お空は」
「何か不思議な感じだね」
上の青いお空と白い雲、下の緑の草原や赤い荒地を見ながら小鳥
の言葉に答えた。
「まるで夢の中にいるみたいだよ」
「人は夢の中でしかお空を飛べないんだよね」
「うん、そうなんだ」
夢の中では幾らでも飛ぶことはできる。けれど起きたらそれはで
きないことだった。
「翼がないから」
「だから遠くにも行きにくいよね」
「すぐには行けないよ」
やっぱり翼がないからだ。これだけはどうしようもなかった。
「こんな速く動くことなんてできないから」
「それじゃあ。ある場所に行かない？」
「ある場所って？」
「君に一つ見せたい場所があるんだ」
不意にこんなことを僕に話してきたのだった。
「ちょっとね」
「見せたい場所って？」
「来てくれるかな」

小鳥は僕に答えずにまた言ってきた。
「一緒にね。いいかな」
「何かよくわからないけれど」
実際僕には小鳥が何を言いたいのかさっぱりわからなかった。けれど小鳥の言葉には絶対に僕に来て欲しいという気持ちがあることがわかった。

第三章

「それじゃあ」
「よかった。それじゃあね」
「うん」
「こっちだよ」
ここで右に曲がってきた。
「こっちに来て。いいよね」
「うん。それじゃあ」
僕は小鳥の言葉に従って彼の後をついていった。案内されたのは一軒の古ぼけた家だった。古い洋館でもう随分と長い時間が経っているのがわかる。白い壁に蔦がまとわりついている。 僕達はそこに来た。そうしてその洋館の二階の窓のところに止まった。その二階の窓のガラスは割れていてそこからベールが見える。白いけれど埃まみれのベールだった。
「ここが？」
「うん、ここなんだ」
小鳥は僕に顔を向けて答えてくれた。僕達はその窓のところに並んでいる。
「ここにね。来て欲しかったんだ」
「どうしてここに」
「覚えてる筈だよ」
小鳥は不意にこんなことを僕に言ってきたのだった。
「君はね。絶対にね」
「僕が覚えてるって？」
「そうだよ」
小鳥は僕に顔を向けて優しい声で答えてくれた。
「この洋館をね」
「この洋館に」

「ほら、昔のことで」
小鳥はまた僕に言ってきた。
「来たことがあった筈だよ」
「ええと？」
僕は小鳥の言葉を聞いて何かを思い出そうとした。そういえばこの洋館は。
「前に来たことが」
「あったよね」
「うん、そういえばね」
小鳥に言われるまま何となく思い出してきた。
「ここにね。来たことがあったね」
「それは一度だけだったかな」
「いや、違うよ」
僕はこのことも思い出した。
「何度も来たよ、ここに」
「そうだよね。それに一人で来ていた？」
小鳥の問いは続いた。
「一人だった？ここに」
「ううん、一人でもなかったよ」
僕はこのことも思い出した。
「そうだ、そういえば」
「思い出してくれた？」
「うん、僕は一人でここに来ていたんじゃない」
はっきりと思い出した。
「二人だ。二人で来たんだ」
「そうだったよね。二人だったよね」
「うん。いつも二人でここに来ていた」
そのことをさらに思い出した。
「あの彼と」
「彼とだよね」

「ずっと僕の側にいてくれた彼と一緒に」
その遠くへ行った友達と一緒にいつもここに来ていた。このことを思い出した。
「来ていたんだ、ずっと」
「思い出してくれたね」
「うん」
小鳥は僕の顔を見て微笑んでくれていた。どういうわけか僕は頬から涙が流れるのを感じた。鳥が涙を流すことがあるなんて夢にも思わなかった。
「思い出したよ、それも」
「だから君に来て欲しかったんだ」
小鳥はさらに僕に言ってくれた。
「ここにね」
「そうだったんだ」
「ずっと探してたんだ」
小鳥の言葉は続いた。

第四章

「ずっとね。君をね」
「僕を・・・・・・」
「そして君を見つけて」
「それでだったんだ」
「そう。だからもう空に戻りたくはなかったんだ」
僕の背にある空を見上げての言葉だった。その青い、雲以外は何もない空を見上げていた。
「あの寂しい空にはね」
「そうだったんだ。それで空には」
「ずっと君の側にいたくて」
小鳥の声が寂しげなものになっていた。
「君の側にね」
「それで来てくれたんだ」
「全てが適ったから」
僕にはもうこの小鳥が誰なのかわかってきた。けれどそれはあえて言わなかった。
「だからね。君のことだけは忘れなかったよ」
「有り難う・・・・・・」
「それじゃあ。帰ろう」
小鳥は最後に羽ばたいたうえで声をかけてくれた。
「君の場所にね」
「うん」
僕達はまた二羽、いや二人で空に飛び立った。寂しい空も二人だと寂しくはなかった。そして空を飛んでいるうちに何か白いものに包まれて。気付いた時にはベッドの側で寝ていた。
「あれっ？」
「こんなところで寝ていたら駄目よ」

後ろからお母さんの声がした。僕は窓の側で椅子に座ったまま寝てしまっていた。気付くと肩から柔らかい毛布がかけられていた。
「風邪ひくわよ」
「この毛布お母さんが？」
「ええ、そうよ」
お母さんの声がした方に顔を向けるとお母さんがいた。穏やかな笑顔で僕に答えてくれた。
「寝てたからね」
「有り難う」
「御礼はいいわよ。それにしてもね」
「何？」
「窓のところに」
ここでその窓のところを見た。
「羽根があるわね」
「あっ」
見れば本当だった。そこには白い羽根が落ちていた。写真のかけらに木の実、それにボタンも側にあった。夢の中にある筈のものが。
「本当だ。羽根が」
「けれど鳥なんてずっといなかったのに」
「ううん、いたよ」
僕はこうお母さんに答えた。
「さっきまで。ずっとね」
「そうだったの？」
「うん、いたよ」
僕はまたお母さんに答えた。
「ずっとね。いたよ」
「お母さん見ていないけれど」
「それでもいたんだ」
僕の答えは変わらなかった。
「ずっとね。いたよ」

「そうだったの」
「有り難う」
僕はその窓のところの白い羽根を見てこう言った。
「ずっと。忘れないよ」
僕も忘れるつもりはなかった。彼のことを。今その白い羽根を見ながらそのことを思うのだった。静かで、優しい気持ちになって。一人思った。

鳥になった少年の唄　　完

２００９・２・１８

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8753h/

鳥になった少年の唄

2010年10月8日15時36分発行